

令和6年7月9日 第68回黄檗山原爆被災者法要 祭文

本日、ここに第六十八回長崎原爆被災者慰霊法要を挙げるにあたり、原爆の犠牲になられた方々の御霊に対して、謹んで哀悼の意を捧げます。

昭和二十年八月九日、二代目社長故田中正行は、生地長崎において原爆に遇い、一瞬にして焦土と化した郷土を苦痛に喘ぎながら彷徨う人々の姿に、このような悲惨な事態を二度と繰り返してはならないと心に固く誓いました。爾来、商道に励むかたわら、昭和二十九年より、タナチョーグループ企業の行事として、この慰霊法要を執り行うこととなりました。その遺志は、故人亡きあと、歴代社長に引き継がれ、本日ここに第六十八回目を迎えることが出来ました。この間、故人の誓いを守り御霊へのささやかな供養を続けられましたのは、偏にご協力戴いている皆様のご懇情の賜と心から感謝申し上げます。

さて、世界情勢は、米中衝突、台湾有事の可能性、中東の緊張、北朝鮮の核兵器開発、ウクライナ戦争に加え、昨年からはイスラエル・ハマスのガザ紛争も加わり、核軍縮・核管理からは、かつてない程離れた、懸念すべき状況にあります。こうした中であっても、昨年9月には第13回包括的核実験禁止条約（CTBT）発効促進会議にて早期の署名・批准の呼びかけがなされ、12月には第2回核兵器禁止条約締約国会議にて核なき世界への宣言がなされました。今年3月には日本政府主催の「核軍縮・不拡散」安保理会合も開かれました。また、映画「オッペンハイマー」が核兵器の非人道性を描いたことは一定の影響があったものと思われまふ。

核軍縮・管理の現状は大変憂慮される事態にありますが、このような時だからこそ、核軍縮・管理を進める声を上げ続けなければなりません。各国・各関係団体の地道な努力も続いており、また長崎市を始め民間ベースでのささやかな運動も、数多く展開しています。

わが国は人類史上唯一の被爆国であり、その悲劇を二度と繰り返さないとの決意の下、「**NO MORE 長崎**」の運動は継続させていかなければなりません。タナチョーグループは、微力ですが、引続き核軍縮・核管理の運動を支援して参ります。

毎年暑い夏がきて、この日が近づくにつれて私は、亡き祖父・田中正行の残した訓えと平和への願いを想起し、決意を新たに致します。私は、故人の遺志を心として、この法要を続けて行き、故人に恥じない足取りで歩みたいと存じます。

終わりに臨み、この法要がタナチョーグループの精神的基盤として、協調と繁栄の源泉となることを祈るとともに、今日の日本の平和の礎となられた方々への御霊の安らかならんこと、そしてご協力戴いている皆様のご健勝とご隆盛を心から祈念しまして法要の言葉と致します。

令和六年七月九日

株式会社 タナチョー
代表取締役社長 田中 廣